

岩手教区報

1月26日、教祖140年祭が執行されました。親神様、教祖に年祭活動の報告と、三年千日をお連れ通りいた御札を申し上げ、次なる塚への出発点として、有意義な年になるよう思い念じて、心して参拝させて頂きました。

平成13年に教会长を拝命してから丁度10年目に、歯肉腫瘍ステージ4の診断を受けました。その後6か月間入院し、命の危険にさらされたり、術後に顔がバスケットボールほどに腫れ上がつたりと、種々困難な経験をしながら退院しました。家族や信者さん方には、相当心配をかけたと思います。表題は、退院後教会に帰り、母から掛けられた最初の言葉です。

母は未信仰の家庭で育ち、19才の時、親同志が知り合いという仲で、夫となる人の顔も家業も知らないまま、千厩から盛岡の父のもとに嫁いできました。嫁ぎ先の玄関を開けて初めて天理教の教会であることを知り、母の耳もとで「3日経つたら戻つておいで」と言つて仲人は、すぐ千厩に帰つていったそうです。厳しい祖母でしたので、床につくまで起きていて夜なべをし、修養科に入る時も、食料難の時代の中、汽車に乗つて行く際、衣服の中に米を忍ばせておぢばへ帰つ

たそうです。修養科を了えて盛岡に戻つてからは、赤子を背負いながら、毎日にをいがけに歩きました。祖母の出直し後、父である前会長の手足となつて、5人の子供を育てながら得意な裁縫を生かし、布団や座布団作りの手仕事をして教会の家計を支え、生活の土台を作つてくれました。

18年前、父が出直してから間もなく母の耳が聞こえにくくなりました。その2年後に私が前述の身上を頂いたのです。退院後母は、「退院、おめでとう」ではなく、「よかつたね。今まで他人様の身上話しか話せなかつたけど、これからは自分の身上話でにをいがけおたすけができるね」と。最初は理解に苦しみましたが、日が経つにつれてその言葉の重さがひしひしと伝わつてきました。あの時の母の一言が、私のにをいがけ、おたすけに臨む礎となり、一日一日の通り方を変えたと思っています。

90歳過ぎてから認知症を患い、3年前には誤嚥性肺炎で入院し、一昨年介護施設へ入所しました。今月末98歳になります。お道の信仰をまつすぐ通つて生き来た母を、私たちは最期まで、しつかりと身守つています。

母の一言「よかつたね・・・」
道の教職員の集い代表世話人
門間道明

道の教職員の集い代表世話人

門間道明

第398号
立教189年2月1日
天理教岩手教務支庁
盛岡市馬場町3-40
TEL 019-622-7962
FAX 019-623-9597



る所です。このかぐらづとめによつて、あらゆる身上、事情のたすけを引き受けら
れると教えられます。

年祭に向けて教会長登殿参列があり、
かぐらづとめを拝された教会長さんは
お分かりだと思いますが、かぐらづとめ
は、かんろだいを囲んで、十人のつとめ
人衆が、立つておつとめになります。第
一節のおつとめでは、「あしきをはろうて
たすけたまえ」までは、足を右左と交互に
踏みながら、お手は私たちが朝夕勤める
手振りと同じですが、「てんりおうの」で
右足左足と下がつて、「みこと」で右足左
足と前に出て、十全のご守護の理を現す
それぞれ違う手振りでつとめます。いざ
なぎのみこと、いざなみのみことは便宜
上、かんろだいの東側で向かい合つて、つ

心臓は、血液に酸素と栄養分を乗せて、身体中の隅々の細胞にまで届けてくれています。そして、戻る時には、その細胞から出た二酸化炭素と老廃物を運び、また心臓から新たな酸素と栄養を乗せて届けてくれるのです。

かぐらづとめが心臓の働きであるならば、血液の働きはわれわれようぼくの働きです。かぐらづとめで、かんろだいからこんこんと湧き出る泉のような、生命のエネルギーを、酸素と栄養の代わりに持つて、それぞれの地域にいる身上事情の方々にそれを届ける。そして、二酸化炭素と老廃物である、悩み、苦しみを頂いて、またおぢばに帰る。さらに、またかぐらづとめで、また新しい生命の力を頂いて帰り、送り届ける。この繰り返し

行事予定		【2月分】
14日	1日	役員会議（10時30分）
" "	7日	教区校友研修会（13時）
		青年会例会（18時）
		献血呼びかけひのきしん（10時）
		学生会例会（10時）
		学生担当委員会例会（19時）



誠心

（おぢばがえり）で、おたすけをさせて頂くのが、私たちようぼくのつとめです。

